

18年ぶりの改訂で誕生 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』

～アクセント記号や見出しの立て方も一新～

メディア研究部 太田眞希恵 / 東 美奈子

『NHK日本語発音アクセント新辞典』(2016年5月発行)への改訂について掲載する、シリーズの第1回。改訂の概要についてまとめる。8年間におよぶ改訂作業は、“この辞典の目的は「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」を示すこと”という基本方針に基づいておこなわれ、『新辞典』ではアクセント記号や見出しの立て方も一新した。時代の変化に伴って使われるようになった新しいことばや、アクセントに迷う長い語(「ビッグデータ」「後期高齢者医療制度」)など約4,400語を追加し、本編に収録した語は約7万5,000語となった。また、アクセント変更にあたっては、NHKアナウンサーを対象にした大規模調査をおこない、その結果をもとに約3,300語に変更を加えた。次のようなアクセントを変更した。

▽「熊」:[クマ\]に加えて,[ク\マ]も追加。

▽「あかすり」「雨傘」「べにざけ」などで、平板型が第1アクセントに(4拍和語の平板化)。

▽「座長」「転記」「廃炉」などで、新たに頭高型を追加(二字漢語の頭高化)。

▽「ウォーキング」「ジョッキ」「ナレーター」などで、平板型を追加(外来語の平板化)。

▽「明るい」「遅い」「悲しい」「眠い」などで、新たに中高型を追加(平板型形容詞の中高化)。

▽「1銭」の[イ\ッセン]、「1貫」の[イ\ッカン]などを採用(「数詞+助数詞」を全面的に見直し整理)。

はじめに

5月26日、18年ぶりに改訂されたNHKアクセント辞典が発行となった。1943(昭和18)年に発行された1冊目のNHKアクセント辞典から数えて6冊目¹⁾となる今回の辞典は、その名を『NHK日本語発音アクセント新辞典』という。『新辞典』と呼ぶにふさわしい大改訂がおこなわれたからである。今回の改訂はどのようなものだったのか。辞典そのものがどのように変わったのか。改訂作業を通じて明らかになったアクセント変化やアクセント規則についての知見などを全11回のシリーズとして掲載する。

第1回の本稿は、改訂の概要についてまとめる。第1～3章は太田が、第4～5章は東が執筆した。

なお、本稿で使うアクセントの用語と記号は次のとおりである。



[\] : 音の下がり目²⁾

[ー] : 下がり目なし(平板型)

[頭高型] : 1拍目のあとで下がる

[中高型] : 語の途中で下がる

[尾高型] : 語末で下がる

[起伏式] : 平板型以外の型の総称

1. 文字どおりの『新辞典』

1.1. 新しいアクセント記号「\」「^ー」

まず、もっとも大きな変更は、アクセント記号が変わったことである。これまでのNHKアクセント辞典ではいずれも「音調の高い部分に上線を引く」という方式でアクセントを示してきた。しかし今回の『新辞典』では、音の下がり目を「\」で示し、平板型(下がり目なし)を「^ー」で示し、目立たせるためこれらの記号を赤色で印刷している。また、音の上がり目は「各語の特徴として本質的なものではない」「自然な音調で発音できるようにするためにはむしろ示すべきではない」との考えから示さないことにした³⁾。

1943年版, 1951年版		
ハチス	オトコ	ジテン
1966年版, 1985年版, 1998年版		
ハチス	オトコ	ジテン
2016年版『新辞典』		
ハナ\s	オトコ\	ジテン ^ー

※1943, 1951年版では、平板型には記号を付けずに表していた。1966年版から“棒カギ式”を採用し、音の下がり目を明確に示すようになった。

1.2. 見出しは「国語辞典方式」に

見出しの立て方も大きく変わった。これまで「発音およびアクセント型ごと」に見出しを立てる方式を採ってきたが、『新辞典』では「語ごと」に見出しを立てる方式(=「国語辞典方式」)を採用することにした。

1998年版の例

コ ^ー ホ ^ー	広報, 工法
コ ^ー ホ ^ー , コ ^ー ホ ^ー	公法, 公報
コ ^ー ホ ^ー	後方, 後報, 高峰
コ ^ー ホ ^ー , コ ^ー ホ ^ー	航法

2016年版『新辞典』の例

こうほう	【工法】	コ ^ー ホ ^ー ^ー ㊦
こうほう	【公法】	コ\s ^ー ホ ^ー □
こうほう	【公報】	コ\s ^ー ホ ^ー □
こうほう	【広報】	コ\s ^ー ホ ^ー
こうほう	【後方】	コ ^ー ホ ^ー ^ー
こうほう	【後報】	コ ^ー ホ ^ー ^ー
こうほう	【航法】	コ ^ー ホ ^ー ^ー ㊦
こうほう	【高峰】	コ ^ー ホ ^ー ^ー

※㊦および□は、第2アクセント。㊦は「[コ]の次で下がる」こと(=[コ\s^ーホ^ー])を示し、□は「平板型」であること(=[コ^ーホ^ー^ー])を示している。

これにより、アクセントを知りたいがために辞典をひいているのに発音・アクセント型からしか目的の語にたどりつけない、という従来のジレンマが解消され、見出しで目的の語を探し当て、そのアクセントを確認できるという、思考過程と一致する手順で調べていくアクセント辞典が実現することとなった。

2. 改訂へのみちすじ

2.1. アクセント辞典改訂専門委員会

『新辞典』の改訂作業は、2008年に始まった。編集の方針と方向性を定めるために「アクセント辞典改訂専門委員会」を組織した。専門委員会は、外部の言語学者と放送現場のNHKアナウンサー、および編集事務局である文研・用語班で構成されている⁴⁾。8年間におよぶ改訂作業の節目に計7回の会議を開き、改訂の基本方針、調査の方法や作業方針、アクセント記号や見出しの立て方についての検討・決定などをおこなった。

2.2. 改訂の基本方針は

「放送で用いるのにふさわしい ことばの発音・アクセント」

2008年9月の第2回委員会において、以下のような改訂の基本方針が承認された(坂本充(2008.b))。

本辞典の目的は、「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」を示すことである。

「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」とは、次のような条件を満たすものとする。

- 1 情報伝達の面で伝わりやすい発音・アクセントであること (意味の違いによるアクセントの区別)
- 2 特定の地域を連想させない発音・アクセントであること (地域方言性[東京方言も含む]の排除)
- 3 特定の年代を連想させない発音・アクセントであること (若者アクセントおよび極端に古いアクセントの排除)
- 4 ある程度あらたまった場面での使用を想定した発音・アクセントであること (使用想定場面の指定)

2.3. 基本方針に基づいた調査と編集作業

この基本方針は、改訂のための調査をはじめ、調査に基づいたアクセント変更、追加語や削除語の選定とアクセント付与など、改訂における編集作業のすべてにおいて、必ず立ち返って確認すべきもっとも重要な指針となった。

まず、改訂のためにおこなった4回のNHKアナウンサー調査(第4章で詳述)では、すべての設問において「放送で使うアクセント(発音)としてふさわしいものだと思うか」について尋ねた。調査に回答したNHKアナウンサーは、そのアクセントが、現代のNHKの放送で使うアクセントとしてふさわしいかどうかについて判定する。そして、編集事務局でその調査結果をもとにアクセントの変更/非変更を決定するのにあたって、単に調査の数字のみを根拠にするのではなく、その発音・アクセントがNHKの放送で用いられたときにふさわしいかどうかという点をもっとも重視して議論を重ね、判断し決定する、という作業を繰り返した。

この基本方針について、『新辞典』の解説編I「この辞典で扱う発音とアクセントについて」(塩田雄大(2016.a))では、次のように説明している。

この方針は、この辞典の改訂作業が「日本語として『正しい』『美しい』」「ことばとして『味がある』『風情がある』」などの観点からではなく、「現代の公共的な場面での情報伝達的手段として、(蒸留水のように)もっとも無色透明のもの」を選び出すものとして進められるべきであるという意識のもとに立てられた。

私たちはこの辞典を、「公共的な場面」で「情報伝達」をするNHKの放送において使う発音・アクセントとして“おすすめ”の形を示す書と考え、改訂作業をおこなってきた。逆に言うと、この辞典に掲載されていない発音やアクセントであっても、“日本語として間違っている”というわけではないし、“使うべきではない”などというものではないということである。

3. 『新辞典』で何が変わったか

『新辞典』で変わった点は、「アクセント記号」や「見出しの立て方」、個々の語の「アクセント変更」のほかに、次のものがある。

● 収録語数の大幅増 約7万5,000語

時代の変化に伴って使われるようになった新しいことばや、放送で使われているがこれまでのアクセント辞典には掲載されていなかった語などを拾い出し、約4,400語を追加した。これまであまり掲載されてこなかった「四字漢語」「アクセントに迷う長い複合語」などのほか、追加した語の一例を分野別に表1に示した。ほかにも、動植物名、料理・食材名、スポーツ用語など、多様な分野の語を充実させた。

表1 追加語の例

政治	議員立法、政治活動、当選確実、日米安全保障条約、非改選議席、非拘束名簿式、不信任決議、無党派層
経済	確定拠出年金、公的資金、固定資産税、財政健全化、高止まり、日銀短観、非正規雇用、含み損、マクロ経済、雇い止め
社会	アイドリングストップ、後期高齢者医療制度、孤独死、裁判員、就活、待機児童、ドメスティックバイオレンス、ニート
化学・科学	青色発光ダイオード、遺伝子組み換え、線量計、ニュートリノ、放射性セシウム
医療・福祉	iPS細胞、グループホーム、ケアマネジャー、ジェネリック医薬品、睡眠時無呼吸症候群、認知症、バリアフリー
学校・教育	AO入試、学習指導要領、食育、総合学習、卒業論文、登下校、モンスターペアレント
文化・流行	アンチエイジング、エコバッグ、恵方巻き、オフ会、顔文字、スマートフォン、電子書籍、部屋干し、ワークシェアリング
コンピューター・情報	オンデマンド、ダウンロード、タッチパネル、テンプレート、バージョンアップ、バナー広告、ビッグデータ、無線LAN、ログイン
気象・災害	液状化、温室効果ガス、帰宅困難者、記録的短時間大雨情報、緊急地震速報、地球温暖化、土砂災害警戒情報
四字漢語	会社訪問、家事分担、観客動員、経費負担、権力集中、資金提供、人口減少、責任追及、組織改革、停戦監視、停戦合意
長い複合語	大阪管区気象台、核拡散防止条約、危険運転致死傷罪、公判前整理手続き、児童虐待防止法、特定非営利活動法人、不正アクセス禁止法違反

● 動詞・形容詞の活用形を本編に掲載

使用頻度の高い動詞約1,100語と形容詞約200語について、終止形に加えて、活用させた形での発音・アクセントも本編中に掲載した。

例

あつかう【扱う】ア[○]カウ[〰]団

ア[○]カウ[〰]、ア[○]カワナイ[〰]、ア[○]カイマ[〰]ス、ア[○]カイ[〰]、ア[○]カッテ[〰]、ア[○]カエ[〰]バ、ア[○]カオ[〰]ー

あまい【甘い】アマイ[〰]団

アマイ[〰]、アマ[〰]カッタ、アマク[〰]、アマ[〰]テ、アマ[〰]ケレバ

※[○][〰]など：[○]で囲んだ音は、母音を無声化して発音することを示す。

● 日本の地名で

「地元放送局アクセント」を採用

放送でよく使われる地名を中心に、日本の地名を3,200余り選び本編に掲載した。そのアクセントについては、全国放送で広く使われるアクセントを採用して示したほか、全国にあるNHKの各放送局にも調査をおこない、地元の放送局で実際に使っているアクセントも調べた⁵⁾。そして、全国放送で広く使われるアクセントと、地元放送局が主に使うアクセントが異なる場合には、後者を新たに「地元放送局アクセント」として、以下のように示した。

例

いな【伊那】[地名] (長野) イ[〰]ナ[□]

(地元放送局では「イナ[〰]」も使う)

まえばし【前橋】[地名] (群馬) マエ[〰]バシ[□]

(地元放送局では「マエバシ[〰]」も使う)

● 付録(解説・資料)の充実

巻末付録の解説や資料も充実させた。

「5本」「15日」などのものの数え方(「数詞+助

数詞)は、258種類の助数詞を示して「20」までの数や「何(なん)」に付いたときの発音とアクセントを一覧表で示し、そのうち特に使用頻度の高い49種類の助数詞については、「100」までの数や「1000」「1万」に付いたときの発音とアクセントも掲載した。その一覧表は全117ページとなった。

ほかにも、「～そば」「～為替」など、複合名詞のアクセントの記述を充実させ812の見出しを示したほか、名詞・動詞・形容詞にさまざまな助詞・助動詞などの付属語が付いたときのアクセントについても原則や傾向がわかる詳細な解説と一覧表を掲載して、より実践的に役立つ付録として充実させた。

4. NHK アナウンサーへの調査に基づいたアクセント変更

4.1. かつてない大規模な調査

(1) 7年かけ、4回の調査

辞典の改訂のたびに、用語班ではアクセント調査を実施してきた。NHKアナウンサーを対象にしたものを中心に、その他、山の手と下町で中学生と保護者を対象にした抵抗感調査、東京・大阪・豊橋で地域差を調べるもの、民放アナウンサーへの調査などである。手法も筆記

式、音声聴取式、録音式とさまざまであった。

今回はNHKアナウンサーを対象に、2008年から手法や目的が異なる4回の調査をおこなった(表2)。

一番の特徴は、これまでにない多数の語を調べたことである。本調査として位置づけられる第2回・第3回調査であわせて約5,500語というのは、前回は900語だったことと比べても規模が大きいことがわかる。

これだけの数を調査したこと、また可能だったことには次のような理由がある。

1. ある語のアクセントを変更するにあたっては、主観や他辞書の記述に頼らず、調査結果の数値に基づくことを原則とした。つまり、変更の候補となりうる語については、一律に調査対象に含めた。

前回までの改訂作業では、調査を実施していない語については、他の辞書の記載と同類の語の変化傾向をもとに変更を加えたものもあったが、今回はなるべく多くのデータを集め、個々のデータを重視した。

2. 調査環境の進歩で多数の語の音声調査が可能になった。前回までは、例文を読み上げてテープに録音してもらったものを事務局で聴き取る手法であったため膨大な時間と手間がか

表2 調査概要

調査回	実施日	名称	調査方法	回答者 (NHKアナウンサー)	調査語	備考
1	2008年 10～11月	全項目 調査	指摘式	498人	本編6万9,000語+ 付録7,000語	53のグループ、各10人前後(若年、中堅、ベテランを均等に)。1人あたり約1,500語担当。
2	2009年 10～11月	アクセント 調査	音声聴取式	471人	3,021語 (6,500型)	20のグループ分け(若年、中堅、ベテランの割合を均等に)。局内イントラを使い、音声をランダムに聞いてもらい、型ごとに「○」「×」「☆」で回答。1人あたり約325アクセント型担当。
3	2013年 5～9月	アクセント 調査	筆記選択式	中堅・ベテラン 126人	2,521語 (5,299型)	調査票に示されたアクセント型ごとに「○」「×」「☆」で回答。全員全問回答。
4	2014年 6～7月	鼻濁音 調査	筆記選択式	中堅・ベテラン 67人	141語 (282型)	調査票に示された濁音・鼻濁音ごとに「○」「×」「☆」で回答。全員全問回答。

注 「○」:放送で使うアクセント(発音)としてふさわしい 「×」:ふさわしくない 「☆」:このことばを口に出して言ったことがない

かった。今回、NHKのイントラネットを使い、各局アナウンサーがパソコンで音声を聴き取って判定する方法を取り入れたため、大量の調査が可能になった。

(2) “全項目調査”と“本調査”

第1回調査は、“本調査”(=第2回・第3回調査)で調べるための語を選定する予備調査に位置づけられる。この調査では、NHK全アナウンサーを53のグループに分け、1語あたり約10人(若年、中堅、ベテランの割合を均等にした)が目を通すよう設計し、全項目をチェックしてもらった(=“全項目調査”)。これも初の試みであったが、総計1万2,000語という変更候補を洗い出すことができ、改訂作業の重要な基礎資料となった。

アクセントに関する指摘はのべ2万3,000件(追加4,000件、削除1万1,000件、順序入れ替え約8,000件)であった(坂本充(2009.b))。

もっとも指摘が多かった語は「悪意」。1998年版は[ア\クイ、アク\イ]だったが、10人全員が2番目の[アク\イ]を削除したほうがよいという意見だった。

次いで9人の指摘があったのは、「秋物」[ア

キノ\、アキノ\]の2番目を削除、「生後」[セ\コ、セコ\]を順序変更、「フローリング」[フロ\ーリング、フロー\ーリング]は2人が1番目を削除、7人が順序入れ替えという意見だった。

こういった指摘人数が多い語をまず第2回調査で全アナウンサーを対象に、次いで第3回調査で中堅以上のアナウンサーを対象に実施した(図1)。

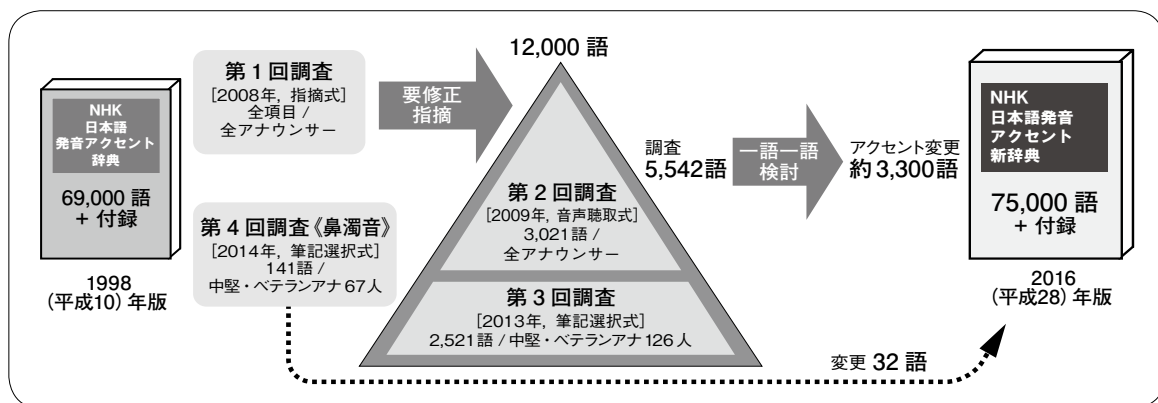
(上記の語は最終的に[ア\クイ][アキノ\][セコ\、セ\コ][フロ\ーリング]に変更した)

4.2. 調査結果をどう反映させたか

第2回・第3回調査をした語については、調査結果をもとに、一語一語について、変更するかどうかを検討した。

これまで示していたアクセント型の「削除」は、おおむね、そのアクセント型に対するアナウンサーの支持率(「放送で使うのにふさわしい」と答えた人の割合)が30%未満のものを、新しいアクセント型の「追加」は50%以上のものを、複数のアクセント型の提示順を入れ替える「順序変更」は、第2アクセントの支持率が

図1 調査改訂イメージ



第1アクセントよりも30%以上上回っているものを目安として変更候補にあげた。ただ、いずれも、数値だけではなく、各語の性質や歴史を踏まえて検討・判定して、最終的には約3,300語⁶⁾に変更を加えた。

また、今回の調査では3番目の選択肢に「口に出して言ったことがない」というものも加えた。前回(1998年版)の改訂委員会で、「全くその語に縁のない人が判断したアクセント(類推したアクセント)の調査データは意味がないのではないか」という意見が出た反省でもある。「言ったことがない」という回答は、伝統的な語や専門用語が多かった(例:くけ台, しっかい《悉皆》, 旦夕(たんせき), トリル[音楽])。これらの語は、今までの記載を重視し、アクセ

ントの変更は最小限にとどめた。

調査語以外では、たとえば、「父」のアクセントの変更に伴い、「父の日」についても変更。「施設」は[シ\セツ][セ\セツ]と2つの型があるので、「〇〇施設(介護老人保健~, 児童養護~, 補給~)」にも2つの型を入れて統一するなどの変更をおこなったものもある。

5. アクセントはどう変わったか

次に、実際にどのようにアクセントが変わったのか、和語、漢語、外来語などの種類ごとに傾向や特徴的な語を紹介したい。変更方法や語種ごとの内訳は表3・4にまとめた⁷⁾。

表3 アクセント変更種別

変更種別	語数	(内訳)	例	1998年版のアクセント	2016年版のアクセント
①順序変更のみ	819		愛読書	アイド\クシヨ, アイドクシヨ ^ー	アイドクシヨ ^ー , アイド\クシヨ
②削除のみ	1,379		悪意	ア\クイ, アク\イ	ア\クイ
③追加のみ	486		あじさい	アジサイ ^ー	アジサイ ^ー , アジ\サイ
①②③の複合	271				
順序変更+削除		24	あし笛	アシブ\エ, アシ\ブエ, アシブエ ^ー	アシブエ ^ー , アシブ\エ
順序変更+追加		206	合いの手	アイノ\テ, アイノテ\	アイノテ\, アイノテ ^ー , アイノ\テ
削除+追加		41	揚げ餅	アケ [°] モチ ^ー , (アケ [°] モチ\), (アケ [°] モ\チ)	アケ [°] モチ ^ー , アケ [°] \モチ
その他(2単位語を含む語)	333				
合計	3,288				

*このほか、語の単位区切りを変えたものなどが412語ある。

表4 アクセント変更種別(1単位語:語種・品詞ごと)

変更種別	和語	漢語	和漢混種語	外来語	外来語混種語	動詞	形容詞	その他	合計(語)
①順序変更のみ	283	246	71	63	8	93	8	47	819
②削除のみ	313	582	113	71	6	195	26	73	1,379
③追加のみ	176	132	32	75	6	24	15	26	486
①②③の複合	108	89	27	27	0	6	2	12	271
合計(語)	880	1,049	243	236	20	318	51	158	2,955

*動詞・形容詞は複合動詞・複合形容詞も含む。

● 和語

(1) ついに[ク\マ]が出た!

改訂のたびに話題になる語がいくつかあるが、「熊」はそのひとつだ。

世間一般には[ク\マ]という頭高型を頻繁に耳にするものの、NHKでは一貫して[クマ\]という尾高型のみであった。今回は2番目に頭高型の[ク\マ]を加えた。

過去の3回の調査では「裏山に熊が出た」という文の読み上げをアナウンサーに依頼してその録音テープを事務局で聴き取る方法や、選択肢から1つを選んでもらうアンケート方式であった⁸⁾。図2のとおりいずれも[クマ\]を支持する回答が圧倒的に多く、1981年の調査報告では「熊」は「伝統的な尾高アクセントに統一される方向に向かっている」と報告されているし、前回(1998年版)の改訂でも、尾高型のみで問題なしということで、検討の俎上にもあげられなかった。

図2 「熊」のNHKアナウンサー調査の結果(語別)

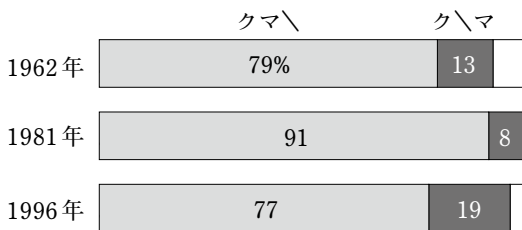
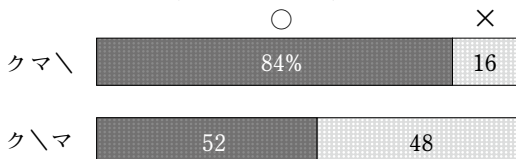


図3 「熊」のNHKアナウンサー調査の結果(2009年/型別)



* 2009年は、それぞれの型について聞いた

今回は、今までと質問のしかたが異なり、頭高型、尾高型それぞれについて、「○放送でふ

さわしい」「×ふさわしくない」で回答してもらったので、これまで表に出にくかった[ク\マ]への抵抗感など、より実態に即したデータを得ることができた(図3)。

また、年代差をみると、34歳までの若年層は従来の尾高型に「×」を付けた人が36%もいる。今後、頭高化はさらに加速しそうだ。

同様に、2拍和語で尾高型から頭高型に変化しつつある語では、以下の語を変更した。

くす《楠》 クス\⇒クス\, ク\ス
 さじ《匙》 サジ\, サ\ジ
 ⇒サ\ジ, サジ\
 父 チチ\, チ\チ
 ⇒チ\チ, チチ\
 (注: 丸印は頭高型、半丸印は尾高型)

(2) 4拍和語の平板化

和語のうち4拍語の平板化は前回(1998年版)の改訂同様、多くみられた(「名詞+名詞」「名詞+動詞連用形」「動詞からの転成名詞」など語構成は多様)。

・平板型を第1アクセントにした語

あかすり、雨傘、とじふた、ねぎらい、はらわた、べにざけ、やり投げ

・平板型を新たに追加した語

雨靴、しめさば、練り物、花筒、ゆで麵

● 漢語

(1) 二字漢語の頭高化

前回(1998年版)の改訂で、「資産」「卵白」「罫線」などに新たに頭高型を追加した。今回もこの流れは進んでいて、以下の語に新しく頭高型を加えた。いずれも放送によく出てくる語である。

● **新たに頭高型を追加した語**

遠近, 顕示, 鉍石, 採択, 座長, 市制,
資本, 処断, じん帯, 心拍, 頭巾, 賃貸,
転記, 討伐, 乳腺, 廃炉, 羊水

同じく, 頭高化が進んでいて, 元からあった
平板型が削除され, 頭高型のみになった語は
次のとおり。

● **頭高型のみになった語**

医療, 隕石, 緩急, 眼中, 強弱, 原点,
口論, 斜面, 執念, 焦点, 前回, 体温,
代金, 暴露, 野心, 与党, 料金, 林業

(2) 「二字＋一字」漢語の平板化

「〇〇品」「〇〇会」のように後ろが一字の漢
語は, [〇〇\ヒン] [〇〇\カイ] のような従来
の中高型から平板型にうつる傾向にある。語
数も多く, その一部を紹介する。

● **中高型を削除し, 平板型のみになった語**

国際法, 自閉症, 紹介状, 食料品, 水平線,
退職金, 太陽系, 取締役, 病原菌, 弁護人

● **新たに平板型を追加した語**

化粧水, 検査役, 護衛艦, 指南役, 謝恩会,
生徒会, 世界史, 断熱材

● **外来語**

(1) 平板化は今も進行中

前回の改訂作業をしていた20年前は外来語
の平板化がとかく話題を集めていた時期であっ
た。今回も静かに平板化は進んでいて, 69語
に平板型を新たに追加した(前回は70語)。そ
の一部を紹介する。

● **新たに平板型を追加した語**

ウォーキング, キャラクター, グラス,
クレーター, ゲージ, ジョッキ, スピーカー,
ナレーター, パネラー, ユーザー, ラベル

(2) 使い分けを明確にした語

1998年版で, 「サポーター」は“応援する人”
と“医療器具”とでアクセントを区別していた。
今回は, 使い分けがあるのではないかとアナウ
ンサーから指摘を受けた語について, 意味や
用例をつけて細かく調査をおこなった。その結
果, 新たに使い分けを明確にした語には以下の
ようなものがある。

* **クラブ** (1998年版 [ク\ラブ]のみ)

⇒ [ク\ラブ] ~に所属する, ~のホステス
[クラブ^ー] ~で踊る

* **ネット** (1998年版 [ネ\ット]のみ)

⇒ [ネ\ット] ボールが~にふれる
[ネット^ー] インターネットの略

● **動詞・形容詞**

(1) 複合動詞の起伏化

複合した動詞は前部・後部のアクセントにか
かわらず, 平板から起伏式(中高型)にうつる
傾向があるが, 今回の調査でも顕著であった。
拍数の長い語ほど中高型になりやすい。

● **平板型を削除した語**

歩み寄る, 歩き回る, 痛めつける, 動き出す,
帰り着く, 崩れ落ちる, 差し押さえる,
調べ直す, 疲れきる, 話しかける

(2) 前部にアクセントがある複合動詞

前部のアクセントを生かす形の複合動詞のア

クセントは、[オモ\イダス][ドナ\リコム]のように強調形で残ってきたが、アナウンサーの抵抗感も大きく、以下のような語で前部アクセントを削除した([]内は削除したアクセント)。

思い出す [オモ\イ~], 駆けずり回る [カケズ\リ~], 絡みつく [カラ\ミ~], 静まり返る [シズマ\リ~], 耐え忍ぶ [タ\エ~], たたき出す [タタ\キ~], 引っ張り出す [ヒッパ\リ~], 弱り抜く [ヨワ\リ~]

(3) 平板型形容詞の中高化

形容詞は中高型が多く、少数派の平板型形容詞も、中高化が進み、統一に向かっている。今回もアナウンサーからの指摘が多く、以下の語に新たに中高型を追加した。

・新たに中高型を追加した語

明るい, 浅い, 甘い, 遅い, 重たい,
悲しい, 煙い, 冷たい, つらい, 眠い,
眠たい, 平たい, 優しい, 易しい

ただ、動詞や形容詞のアクセントは終止形(辞書形)の変化が進んでも、活用形の変化は遅れる。そういったことも鑑みて、名詞に比べ、追加や順序変更を慎重におこなった。

たとえば「眠い」は、第2回調査で[ネムイ^ー]26%、[ネム\イ]91%と中高型の支持率が圧倒的であり、検討途中段階では1998年版の[ネムイ^ー]から[ネム\イ、ネムイ^ー]に変更する予定だった。しかし、第1アクセントが[ネム\イ]だとすると、活用形は[ネ\ムカッタ][ネ\ムケレバ]となることになり、これには違和感があるという意見が示されたため、再検討のうえ第1アクセントを平板型にして[ネムイ^ー、ネム\イ]とした(平板型なので活用形は[ネム\カッタ][ネム\ケレバ]となる)。

●数詞+助数詞

「1銭」「1合」「1貫」は、1998年版では[イッセ\ン][イチコ\ー][イッカ\ン]のみである。しかし第2回調査では、それぞれ[イ\ッセン][イチ\コ\ー][イ\ッカン]がアナウンサーの支持率100%となった。

そのため、今回、この3語は伝統的なアクセントに加えて、上記の新たな型を追加するなど「数詞+助数詞」を全面的に見直し、整理した。

従来から指摘されていた「数詞+円」は平板から起伏化する傾向にあったが、調査も参考に変更した(網掛け部分が追加したアクセント)。

1円	[イチエン ^ー , イチ\エン]
2円	[ニエン ^ー , ニ\エン]
3円	[サンエン ^ー , サ\ンエン]
4円	[ヨ\エン]
5円	[ゴ\エン]
6円	[ロクエン ^ー , ロク\エン]
7円	[ナナ\エン]
8円	[ハチエン ^ー , ハチ\エン]
9円	[キュ\ーエン]
10円	[ジューエン ^ー]

一方、話題に上ることの多い「2月」「4月」は、頭高型[ニ\ガツ][シ\ガツ]は加えず、尾高型のみのみままである。世間では耳にすることも多いが、アナウンサーからは変更の要望もなく、調査をするに至らなかった。

●鼻濁音(ガ行鼻音)

鼻濁音については、改訂のたびに「次回は鼻濁音の表示はいらなくなるかもしれない」と言われるほど衰退を指摘されている一方で、放送現場からは「判断の根拠を示してほしい」という要望が強い。そこで、今回も[カ^ゴキ^ゴク^ゴケ^ゴ]で示した。

改訂専門委員会で、“今回は調査に基づくアクセント変更をおこなっているのだから、鼻濁音についてもデータを集めるべきだ”と委員から指摘を受け、鼻濁音調査を追加実施した(第4回調査、表2参照)。

ゆれのあるものは濁音と鼻濁音の両方を載せて、優先順位を示した。以下は変更例。

・鼻濁音優先⇒濁音優先に変更した語

〇〇楽団 1. ガクダン 2. カクダン
〈管弦～、交響～、室内管弦～〉

〇〇楽器 1. ガッキ 2. カッキ
〈金管～、吹奏～、木管～〉

・濁音優先⇒鼻濁音優先に変更した語

〇〇議会 1. キカイ 2. ギカイ
〈区～、県～、市～、町～、都～など〉
不合格 1. フコーカク 2. フゴークク

最後に

『新辞典』への改訂にあたり、アクセント変更をしたのは、全体からみれば約5%程度であり、95%は旧版を引き継いでいる。

今回の改訂で、歴史的には東京語を基盤として発展してきた「共通語」という観点から離れ、急にかじを切って違う方向に進んだわけではなく、昭和18年から続く伝統を受け継ぎながら、あいまいだった基準をよりはっきりさせ、今後の進路を明確にした。記号や表示方法も含め、新しいスタートを切ったという意味で、まさに『新辞典』である。

(おた まきえ/ひがし みなこ)

注：

- 1) NHKアクセント辞典はこれまでに以下の5冊が発行されている。1943(昭和18)年版『日本語アクセント辞典』、1951(昭和26)年版『日本語アクセント辞典』、1966(昭和41)年版『日本語発音アクセント辞典』、1985(昭和60)年版『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』、1998(平成10)年版『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』。各版の特徴と1998年版への改訂については加治木美奈子(1998.a)を参照。
- 2) 音の下がり目記号「\」は、下がり目の位置を示す。[ハナ\ス]は、[ナ]のあとで音が下がるという意味である。なお、[ユキ\](雪)のように、語の最後に下がり目記号が付いているものは、その語に助詞が付いた場合に[ユキ\ニ]のように[キ]のあとで下がる尾高型であることを示している。
- 3) 音の上がり目を示さなかった理由についての詳細は、『新辞典』(付録/解説編Ⅱ)の「アクセントの示し方について」(塩田雄大(2016.b))を参照されたい。
- 4) アクセント辞典改訂専門外部委員・部内委員は次のとおり(五十音順)。
〈外部委員〉相澤正夫氏(国立国語研究所教授)、井上史雄氏(東京外国語大学名誉教授)、上野善道氏(東京大学名誉教授)、水谷修氏(元国立国語研究所長)。
〈部内委員〉梅津正樹、兼清麻美、佐藤淳、星野豊、芳野潔、渡部英美(いずれもNHKアナウンス室(当時))。
- 5) 『新辞典』の「地元放送局アクセント」とは、「その地名のある地元のNHKの放送局が、全国放送および地域放送の双方で主に使うアクセント」を指す。全国放送では使わず、地域放送のみで使うアクセントは含めない。また、NHKの地元放送局が放送で使うアクセントであり、地元に住む人々がふだんの生活で使っているアクセントとは必ずしも一致しない。
- 6) アクセント変更種別や語種ごとの内訳は、表3・4を参照のこと。
- 7) 表3の「その他」は2単位以上の語(音韻上1つの単位にまとめられない語)でアクセント変更をしたものが含まれる。分類が複雑になるため、変更種別には入れなかった。そのほかに、1998年版と『新辞典』で単位区切りを変更・

整理したものが412語ある。以上をすべて加えると、アクセント変更は約3,700語になる。

8) NHK アナウンサー調査の各回の概要は以下のとおり。

- ・『1962年調査』(424人)：筆記法。現行のアクセント辞典などを参照せず記入することを条件に「もっとも自然に発音するアクセント」を選ぶ回答方法(植地南郎ほか(1962))。
- ・『1981年調査』(545人)、『1996年調査』(439人)：いずれも音声収録式。「アナウンサーが日ごろ放送で使っているアクセント」を読み上げてテープに録音する方法(菅野謙ほか(1982)、加治木美奈子(1998b))。

参考文献：

- ・植地南郎, 西谷博信, 宮脇瑞枝(1962)「標準アクセント選定のための試み—アナウンサーのアクセント調査—」『NHK放送文化研究所年報7』1962年
- ・加治木美奈子(1998a)「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂① 伝統を受け継ぎ、新しい変化にも対応—『NHKアクセント辞典』13年ぶりに大改訂—」『放送研究と調査』1998年6月号
- ・加治木美奈子(1998b)「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂④ 「縦(モミ)」をまき、「桑(グワ)」で耕す?—アナウンサーアクセント調査報告③「和語」—」『放送研究と調査』1998年10月号
- ・菅野謙, 白田弘, 最上勝也, 宗像朋子(1982)「NHKアナウンサーのアクセント19年の変化」『NHK放送文化研究所年報27』1982年
- ・坂本充(2008a)「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂始まる」『放送研究と調査』2008年8月号
- ・坂本充(2008b)「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂基本方針決まる」『放送研究と調査』2008年11月号
- ・坂本充(2009a)「『アクセント辞典』改訂への要望—現行アクセント辞典・アナウンサー全項目調査から—」『放送研究と調査』2009年2月号
- ・坂本充(2009b)「『アクセント辞典』改訂 第2回調査に向けて—第3回『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員会—」『放送研究と調査』2009年5月号
- ・塩田雄大(2010)「全国アナウンサー音声調査の結果報告—アクセント辞典改訂専門委員会(第4回)から—」『放送研究と調査』2010年5月号
- ・塩田雄大(2011)「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂 調査結果にもとづく作業方針の検討—アクセント辞典改訂専門委員会(第5回)から—」『放送研究と調査』2011年3月号
- ・塩田雄大(2012)「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂 項目表示形式の検討—アクセント辞典改訂専門委員会(第6回)から—」『放送研究と調査』2012年9月号
- ・塩田雄大, 山下洋子, 東美奈子(2014)「『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂 具体的な作業方針をめぐる検討—アクセント辞典改訂専門委員会(第7回)から—」『放送研究と調査』2014年9月号
- ・塩田雄大(2016a)「この辞典で扱う発音とアクセントについて」『NHK日本語発音アクセント新辞典』(付録/解説編Ⅰ)
- ・塩田雄大(2016b)「アクセントの示し方について」『NHK日本語発音アクセント新辞典』(付録/解説編Ⅱ)